真霊写心

PN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真霊写心

【Ｎコード】
Ｎ２９５５Ｄ

【作者名】
ＰＮ

【あらすじ】
クラスメートと一緒撮った写真が心霊写真となった。その日から怪奇事件が起こった。

1

私は人を殺してしまいました。
でもいいのです、私は最初から望んでいたのですから。
私の目の前には切断された右腕、左腕、右足、左足、胴体があります。
この手紙を書きながら、この５つの肉の塊をどうしようか考えています。
正確に言えば、どう調理して食べようか考えています。
ミートボールにしようか、焼肉にしようか、スペアリブにしようか、楽しみです。
以前からカニバリズムというものに興味があり、遂に私の願いが叶うのですね。
私の良き友人へ真心を込めて。
いただきます。

2

「人が沢山いるね」
サオリが八重歯を覗かせて、満面の笑みで言う。
私たちは休日を利用して、遊びに来ていた。
「オイオイ、あんまりはしゃぐなよ。ガキだと思われるだろ」
ユウキがいかにもやれやれといった感じで言う。
「別にいいじゃん」
タツヒコが水を差す。
「んだと～。マキもガキだと思われたくないよな？」
ユウキの問いに対して私は
「まぁいいじゃん」と、素っ気なく返した。
一見、男女2人ずつでダブルデートの様に見えるが、そうではない。
只の仲良しのクラスメートなのだ。
次の日曜日にどこか遊びに行こうよと最初に言ったのはサオリだった。
流行に興味があるらしく、サオリはいつもファッション雑誌を見ていた。
一方私は、今時の女子高生らしくはなく、そういったものには大して興味はなかった。
しかし、親友であるサオリの誘いを断る理由もなく、私たちは今渋谷に来ていた。

サオリは美人だ。
私とは違い、友達も多い。
しかし、近寄りがたいオーラがあるようで、あまり男子が話しかけに行くことはない。
ユウキとタツヒコは中学時代からの友達で、休憩時間はいつも話しあっていた。

ユウキ達とサオリが仲良くなった訳は、彼らがペットの話題をしていた時だ。
以前、サオリが私に教えてくれた。
サオリは欲しいものは必ず手に入れる主義のようで、テレビで紹介されていた犬を気に入り、翌日に買いに行ったこともあるそうだ。
その為、ユウキ達がペットの話題をしている時に、輪に入っていき、仲がよくなったのだ。
それ以来、3人で話をすることは増えたが、サオリが彼女の女友達と話している時は、ユウキ達はその輪には入らず、2人で話をする。
だから、3人で話をする時は、それ以上にはならなかった。

私とサオリが仲良くなったのは、ある日の休み時間だった。
私が文庫本を読んでいる時にサオリが話しかけに来た。
ユウキとタツヒコはテレビゲームの話をしていたようで、話が分からずそれとなく輪から抜けたそうだ。
「それ、どんな本？」
「…恋愛小説」
恋愛小説などではなかった。
本当のことを言ってしまうと、会話が続かないと思ったからだ。
「ねぇ、あなたのことマキちゃんって呼んでもいい？」
突然だったので、驚いた。
私は高校生活で友達が出来るとは思っていなかったからだ。
もっとも、そう言われただけで友達扱いするのは図々しい話だが、私の中ではもはやサオリは友達となった。
「…うん」
私は恥ずかしさを悟られないように答えた。
「私はサオリ。いつか本貸してね」
そう言われるとチャイムが鳴り、返事が出来ないままサオリは自分の席に戻って行った。

私達は渋谷の１０９に来ていた。サオリは楽しそうに服を見ている。
私はあまり興味がなかったので、適当に服と値札を見ていた。
もちろん、買うつもりなど毛頭ない。
「これとこれ、どっちがいいかな？」
サオリが私達に聞く。
「そっちのピンクの方かな？」
１０９に用があるのはサオリだけのようで、さっさと別の所に行きたいのか、ユウキが即答する。
「マキちゃんはどう思う？」
私に聞いても何の参考にもならないのにと思いつつ
「私もピンクの方が可愛いと思うよ」と言った。
ふと気づくとタツヒコが私達を見ていた。
私達の考えを見透かしていたようで、疲れた顔で微笑んだ。

サオリはピンクのＴシャツを買った。
私にはそのシャツにそれだけのお金を出す勇気はないと思った。
私たちは１０９を出て喋りながらブラブラしていた。
夏の日差しがいやに眩しく、それでいて暑い。
私は鞄から小さいペットボトルのお茶を出して飲む。
気付けばハチ公前まで来ていた。
「そうだ。写真撮ろうよ。私デジカメ持って来たんだ」
サオリが嬉しそうに言う。
私をハチ公の丁度正面に立たせ、右にはユウキ、左にタツヒコを並ばせ、写真を撮るために下がった。
私はペットボトルのお茶をどうしようか少し考え、とりあえずハチ公の前足の間に置いた。
ピピッと電子音が鳴る。
いいのが撮れたよとサオリが言って、ユウキとタツヒコがダルそうに見に行く。
私もハチ公の前に置いていたペットボトルを取り、鞄に入れながら

サオリ達に駆け寄る。
「明日プリントして持って行くよ」
そう言うとデジカメを黄色い鞄に入れ、ユウキとタツヒコは待てをされた犬の様にしぶしぶ納得した。

次の日の休み時間、ユウキは昨日のハチ公前で撮った写真の件をサオリに聞いていた。
「変なのが撮れてたの。撮った時は何ともないと思ったんだけど…だから見ない方がいいわ」
サオリは浮かない顔で言った。
私は恐怖よりも興味の方が勝った。
「もしかして心霊写真？」
ユウキが半笑いでサオリに聞く。
サオリは静かに頷いた。
「そんなの大したことないよ。写真持って来てるんでしょ？見せてよ」
タツヒコがそう言うと、断り続けても無駄だと悟ったのか、サオリは1枚の写真をポケットから出した。
私達は息を飲んだ。
最初に目に入ったのは、中央にいた私だ。
首から上がなく、ハチ公の全身が写っている。
私の顔が写っていたなら、全身は写ることはなく、足の部分は隠れるだろう。
私の向かって左側に写っているユウキは、肘から先が消えていた。
そして、向かって右側に写っているタツヒコの膝から下が消えていた。
「デジカメの調子が悪かったんだろ」
そんな訳がないと自分でも分かっていたようだが、ユウキはそう言うしかなかった。
タツヒコの顔は少しひきつっている。

この程度の画像加工なら、知識があれば出来そうだが、サオリがそんなことをする人間じゃないと思ったのか、ユウキとタツヒコはサオリを咎めたりはしなかった。

2人の想像を遥かに越えていたようで、ユウキとタツヒコの口数は明らかに減った。

「やっぱり、見せない方がよかったね」

サオリが泣きそうな顔で言った。

「大したことないって。なぁタツヒコ」ユウキがタツヒコに半ば助けを求める様に言った。

タツヒコは

「うん…」とだけ言って、自分の席に戻って行った。

チャイムはまだ鳴っていなかったが、誰もタツヒコを止めたりはしなかった。

「お祓いとかした方がいいよね？」

サオリが再び泣きそうな顔で言う。

「何？ビビってんの？何もないから心配すんなって」

そう言ったユウキ方がビビっているようだった。

なにせ、自分は被害者なのだ。

写真を撮らなかったサオリを羨ましく思っていただろう。

しかし、私は何も言わなかった。

私はむしろ、これから何が起こるのか少し楽しみでもあった。

その部分では、私は他人と比べて異常だった。

3

私はいつも通り、朝ごはんを食べながらニュース番組を見ていた。
正面には父親がタバコを吸いながら新聞を読んでいる。
殺人事件があったらしい。
被害者はなんと私の通っている高校の生徒だった。
「ユウキくん…！」
私の思っていたことが声になって現れた。
「どうしたんだ？」
父親がそう言うと私の方をチラッと見て、それから目線をテレビの方に向けた。
「お前の高校の生徒か。もしかして友達か？」
私は首を縦に振った。
その時、涙がテーブルに落ちて、初めて自分が泣いていることを知った。
遺体が発見されたのは高校の近くの公園で、そこにある大きな木に足を伸ばして座り、もたれかかって死んでいた。
心臓を包丁の様なもので数回刺された跡があり、両腕の肘から先は切断され、まだ見つかっていないそうだ。
腕の切断部分は斧で切り落とした様な跡ではなく、刃物で肉の部分を切り、骨は糸ノコギリで切断された様な跡だったので、犯人は女性の可能性もあると報道された。
「猟奇殺人事件か…犯人はまだ捕まっていないから、学校が終わったらすぐに友達と一緒に帰りなさい」
父親が言った。
所詮他人事なようで、学校を休めと言われると思ったが、杞憂だった。
私が教室に着くと、教室は不穏な空気で包まれていた。

「ニュース…見た？」
タツヒコがギリギリ聞こえるくらいの乏しい声で聞いてきた。
「うん…ユウキくん…」
それだけで十分会話は成立したようで、タツヒコはまるで足に重りのようなものがついているかのように、引きずりながら席に戻って行った。
何処からか視線を感じたので探した。
マキだった。
じっと私とタツヒコのやりとりを見ていたらしい。
「マキちゃんもニュース見た？」
私は近づいて聞いてみた。
「見たよ。ユウキくん、写真の通りになったね」
マキの眼は輝きを失った漆黒のガラス玉の様な眼をしていた。
「やっぱりあの写真、お祓いした方がいいよね？」
私の問いには答えず、マキは眼の色を変えず、じっと私の方を見つめていた。
「あの写真を撮らなかったら、ユウキくんは殺されなかったのかな？」
突然、マキは言った。
「きっと幽霊か何かの仕業だよ。だって、腕が切られるなんておかしいよ」
私は非現実的なことだと分かっていながら、マキにそう説明した。
マキはまた無言になった。

ユウキが殺されてから2日が経った。
犯人はまだ逮捕されていない。
タツヒコはどうにか登校してきてはいるが、精神的にかなり追い詰められていた。
写真の話は私達3人以外誰も知らないし、お祓いもしていない。
事件以来私達は口数が減った。

このまま高校を卒業するのだろうかと考えたが、そんなことはもうどうでもよかった。
ハチ公前で撮影した写真を見る。
タツヒコは笑っている。
もうこの笑顔を見ることは出来ないのかと考えた。
次の日、事件は起きた。

4

僕は、ユウキが殺されてから、生きる希望をなくした。
ただ、死んでないだけの日々。
毎日が辛かった。
学校でも、僕はガラスの様に透明な存在になった。
ガラスは傾けると光の反射で実態が見えるけど、僕はまるでそのガラスをさらに油に浸けたような存在になっていたように思う。
ガラスは油に浸けると、屈折率が限りなく近い為、全く見えなくなる。
教室は油で、僕はガラス。
溶け込んでいたという例えではなく、存在感がないということだ。
休み時間にサオリやマキと会話することは殆どなくなった。
僕としては、放っておいてくれという気持ちだったので、むしろそれでよかった。
でも、やっぱり寂しかった。

ユウキが殺されてから3日目の朝、机の中に1枚の紙が入っているのに気が付いた。
いかにも女子高生が書いた様な文字で
「今夜8時に駅に来てほしい」とだけ書かれている。
そこには差出人の名前も書かれていた。
僕は、5分前に駅に着いた。
しばらくすると彼女が来た。
渋谷に行った時と同じ格好だったので、すぐに分かった。
「ちょっとついて来てほしいの」
彼女はそう言ったが、僕は彼女の目的を特に聞いたりはしなかった。
僕達は歩きながら話した。
「ユウキくん、写真の通りになったね。タツヒコくんもやっぱり怖

い？」
僕は彼女と並んで歩いていたが、彼女の目線はまっすぐ向いたまま、僕の方を見ずに話した。
「正直怖いよ。どうしてユウキは殺されたんだろう？」
本音だった。
強がる必要なんてなかったし、学校での態度からして恐れていることは安易に想像出来る。
「ユウキくんの腕、まだ見つかっていないよね？それが欲しかったのかも」
彼女の言葉に鳥肌が立った。
声のトーンが本気だった為、冗談とは思えなかったが、僕はそれを流すしかなかった。

気が付けば人気のないところまで来ていた。
彼女は何を考えてるのだろう。
何故かものすごく帰りたくなった。
「着いたわ」
彼女が急に立ち止まって言う。
木で出来た少し古い建物だった。
いくら夏といっても8時半は流石に暗くなっていて、さらに街灯の間隔も遠いためはっきり分からなかった。
「ここはこの時期かき氷屋をやっているの。私のお父さんは釣りが趣味で、その時に使う氷を運んで欲しいの」
そう言うと彼女は店の裏に回ったのでついて行く。
そこには業務用というものなのか、大きな冷凍庫があった。
「この店は私の知り合いがやってるから、盗むわけじゃないからね。ちゃんと知り合いにも言ってあるわ。黙っていてごめんなさい」
「別に最初からそう言ってくれても断らなかったのに」
彼女は申し訳なさそうに言ったので、僕はすかさず言った。
彼女が冷凍庫の扉を開ける。

ゴォーという音と共に、冷たい空気が僕達を包む。
中には袋に入った氷がたくさん置いてあった。
「この氷、どこまで運ぶの？」
僕は氷を持ち上げる前に聞いた。
「店の前までお願い。台車を置いておくから、そこまで運んでくれる？」
彼女は小走りで店の前まで台車を置きに行った。
ここから店の前までは１５メートルくらいだろう。
冷凍庫から店までの道幅は狭い。
割と大きな台車なのだろう、ここまで台車を持ってくるのは出来ないらしい。
「台車置いたから、運んでくれる？」
彼女は戻って来て言った。
「私は１人じゃ運べないから、いつも小分けして運んでいるの。今度の休みにお父さんが会社の友達と釣りに行くことになって、たくさん氷がいることになったの。お父さんは忙しいから頼まれたんだけど、私だけじゃとても…」
僕が断る様な素振りを見せたわけでもないが、彼女はそう説明した。
「よっと…」
余裕だと思っていたが、いざ氷を持ち上げてみると案外重い。
女の子１人じゃとても運べそうにない。

道幅は狭く、暗く、おまけに重いため慎重に運ぶ。
ようやく途中まで来ただろうか。
突然、後頭部を金属製のもので殴られた。
氷を落とし、僕は前に倒れ込む。
僕は意識を失った。
それから何分経ったのだろうか。
次に気が付いた時には、胸に包丁が刺されいた。
その時に犯人の顔を見た。

目が合った。
とても恐ろしく、狂気に満ちた顔だった。
「何故？」僕はそう言おうとしたが、声にならなかった。
意識がなくなる。
僕はここで死ぬんだなと思った。
仰向けになりながら、顔は右に落ちて行く。
犯人の足が見えた。
その横には黄色い鞄が置いてある。
そして、僕は殺された。

5

私の父親は釣りが趣味だ。
いつも父親が釣りの時に使っている、青い大きなクーラーボックスには今、氷と左右の腕、左右の足が保存されている。
それをどうするというわけでもない。
眺めているだけでいいのだ。

最初の事件から4日が経過した。
テレビや新聞などで毎日の様にこの事件が取り上げられている。
そして、今日のニュースで新たに報道された猟奇殺人事件の被害者の足はまだ見つかっていない。
それは今、この大きなクーラーボックスの中にある。
しっかり冷凍保存してあるので、腕は青白くなっているが、腐ってはいない。
足は昨日入れたばかりなので、まだ肌色を保っている。

それらの事件の犯人は同一ではないかと推測され、連続猟奇殺人事件としてニュース番組などで大々的に報道された。
警察は1日も早くこの連続猟奇殺人事件を終わらせようと必死に捜査しているようだが、なにせ目撃情報は皆無の為、お手上げ状態なのがブラウン菅を通して手に取るように分かる。
私のところにも被害者の友人として刑事が聞き込みに来たが、犯人が有力な情報を与える訳もなく、捜査は足踏み状態だった。
でもまだこの事件は終わったわけではない。
このクーラーボックスにはスペースがある。
まだ顔が1つ入るくらいのスペースが。
私はしっかりと次の犯行の計画を立てていた。
落ち度はないか、何度も確認した。

翌日、この悪魔の連続猟奇殺人事件がクライマックスを迎えることとなる。

6

プルルル…
「もしもし」
無感情な女の声。
「話したいことがあるの。会って…」
私はゆっくり言った。
「いいわ。私の家に来る？」
少し冷徹さを増して女が言う。
「うん」
「えっと…私の家分かる？住所は…」
女言った住所を私はメモした。
ここからなら３０分程度だ。

ピンポーン。
私は女の家のチャイムを鳴らす。
「いらっしゃい小西さん」
「あら、どうしてそう呼ぶの？」
私は少し眉をひそめて聞く。
「名前で呼ぶのは人前だけよ」
電話の時にも増して、女は冷酷に言った。
「じゃあ私も藤崎さんと呼ぶわ」
私も同じくらい冷酷に言った。
「そう。とりあえず上がって」
藤崎はそう言うと、おそらく自室があるであろう2階に上がった。

「私の部屋よ」
藤崎は無感情にそう言った。
部屋は割と片付いている。

「ところで話したいことって？」
藤崎はあくまで無感情に話す。
「連続殺人事件の犯人が分かったわ」
私は探偵にでもなったつもりで言う。
「誰？」
藤崎は私をまっすぐ見つめながら言った。
「私よ」
私がそう言い放つと、藤崎の眉が僅かに歪んだ。
私はそれを見逃さなかった。
「どうして…？」
不安じみた声で藤崎は言った。
私は少し口元を綻ばせながら言う。
「私はこれからあなたを殺すわ。これで悪魔の連続猟奇殺人事件は終止符を迎えるわ」

翌日、校庭で藤崎の遺体が発見された。
四肢を切断され、胴体はなかった。
藤崎の右目の下には油性ペンで霊、さらに左目の上には写の文字が書かれていた。
目から血の涙を流している。
両目がえぐられ、左右が入れ替えられていた。
犯人が何故そうしたかは分からなかったが、あるテレビ番組のコメンテーターがそれを推理した。
写と霊の文字からして、心霊写真ではないか、それなら右目が心、左目が真という字に対応する。それを入れ替えていたのなら、左右で真心という字になると。
藤崎の遺体の傍らに落ちていた
「ライ麦畑でつかまえて」という本の最後に角ばった文字で
「あなたに貸すつもりだった」と書かれていた。
犯人は筆跡鑑定で特定されないようにしたのだろう。

そして、指紋も全く残っていなかった。
この事件の犯人は結局分からず、迷宮入りとなった。

7

今私の目の前には青く、大きなクーラーボックスが置いてある。
殺害された藤崎サオリの家から盗んで来たものだ。
中にはユウキの両腕、タツヒコの両足、サオリの胴体が入っている。
しっかり冷凍保存されていたようで、まだ新鮮だ。
ユウキとタツヒコは心霊現象を信じるタチなので、サオリが持って来た写真を見てから不安そうに日々を送っていた。
でも私は初めからサオリのいたずらだと気付いていた。
ハチ公の足の間に置いたはずのペットボトルがなかったからだ。
私は少し驚いたことがある。
サオリがこんなことをするような人間だとは思っていなかったので驚いたのではなく、サオリがユウキを殺したことに驚いた。
もちろん、その時はまだタツヒコが犯人の可能性もあったが、タツヒコが殺されてから私は確信した。
それから、私はサオリに電話をかけ、サオリを殺しに行った。

サオリは欲しいものは必ず手に入れる主義だと私は聞いていた。
ユウキの腕やタツヒコの足、そして私の顔が欲しかった為の犯行かどうかは、もう分からない。
私の犯行動機はカニバリズムだ。
いわゆる人肉食である。
それは以前から興味があった。
何故だかは自分でも分からないが、1度人間の肉を食べてみたかった。
サオリのおかげでもうすぐ願いが叶う。
私は感謝の気持ちを込めて、サオリが初めて話しかけに来た時に、私が読んでいた愛読書
「ライ麦畑でつかまえて」をそっとサオリの遺体の脇に置いた。

サオリに最後に電話をかけた日、私は殺すつもりだった為
「あなたに貸すつもりだった」と予め書いておいた。
そして、真心を込めて眼球を入れ替えた。
ユウキとタツヒコにも感謝をしないといけないと思い、今ようやく
その手紙を書き終えた。
調理が終わり、今私の目の前の皿には3人の肉がある。
私は静かにフォークを持った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2955d/

真霊写心

2011年1月28日04時56分発行